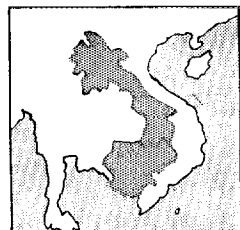


ラオス カンボジア

たか はし たもつ
高 橋 保



まえがき

ここでは、1969年から77年までの、わが国におけるカンボジア・ラオスに関する調査研究について、その主要な成果を紹介することにしたい。なお、1969年前半期までの研究成果の紹介・検討については、拙稿「インドシナ諸国」(『アジア経済』第10巻第6・7合併号 1969年7月)を参照されたい。本稿で取り扱う時期の一般的特徴としては、依然としてわが国における当該地域についての調査研究が著しく立ちおかれており、したがってこの地域に関する学術的な著書・論文の数が非常に少ないという点が挙げられる。

I カンボジアに関する調査研究

カンボジアは1863年から1953年までフランスの保護国としてその植民地支配下におかれていたが、この間この国の社会経済開発は、フランスのベトナム中心主義の政策によるところもあって、同じく仏領インドシナに組み込まれていたベトナムなどに比べて著しく立ちおかれていた。その間の事情は、たとえばフランス資本の投下を中心に第1次大戦にいたるまでの時期について考察した拙稿「仏領インドシナにおける外国資本」〔7〕、さらに、1920年代の仏領インドシナの経済開発の実態について検討した拙稿「1920年代のインドシ

ナにおける経済開発の特質」〔19〕などからもよくうかがわれる。

カンボジアの独立運動は第2次大戦直後、当時のシアヌーク国王のイニシアティブによるところが大きく、したがって1953年の独立達成後1970年初頭までのこの国においては「独立の父」としての実績をバックに国の内政外交を一身に掌握することとなった。拙稿「カンボジア中立主義の基盤とその軌跡」〔5〕は、シアヌーク体制下のカンボジア政治過程について、その中立政策の展開を中心に跡づけたものである。

1970年3月のシアヌーク国家主席解任を契機にカンボジアは左右両勢力間の武力抗争による戦乱の時代に突入した。プノンペンにはロン・ノル將軍を中心とした親米右派政権が興亡し、一方北京に亡命したシアヌーク殿下の一派と、従来からこの国の社会主義化を目指して闘争をつづけてきた、いわゆるクメール・ルージュとが手を結び、それらが左派として解放勢力を構成した。時のたつとともに、これら左右両勢力の関係は次第に左派勢力の優位となって現われた。いわゆるプノンペン政権は常に不安定な状態に置かれていた。拙稿「政変後のプノンペン政権における政治過程の動態——共和制移行からロン・ノル＝ソン・ゴク・タン体制の成立まで——」〔13〕は、このプノンペン

政権の1970年から72年の政治過程の動態を分析したものである。また拙稿「カンボジアをめぐる国際環境——対中ソ関係の展開過程を中心として——」〔9〕は、シアヌーク時代から内戦時代にあたるカンボジア外交を中ソ両国との関係を中心に考察したものである。さらに拙著『カンボジア現代政治の分析』〔12〕は、上記諸論文の成果をもとり入れて、第2次大戦後の独立過程から内戦時代の1972年までのカンボジア現代政治について歴史的に分析したものである。

カンボジアの内戦は、1973年1月のベトナムに関するパリ和平協定成立やそれに引き続いてのラオスでの連合政府樹立気運をよそに、左右両派間の交渉の糸口も開けぬままに、1975年4月17日の解放勢力によるプノンペン解放まで続いた。亀山旭「カンボジア——大国の論理を超えて——」〔3〕は、この期間のカンボジア政治過程の特色について論じたものである。また拙稿“Political Leadership in Indochina 1964-74”〔16〕では、カンボジアの対立する左右両政権の権力構造について分析している。

この国の政治社会構造については、拙稿「ノロドム・シアヌークにおける政治意識と行動」〔14〕、および拙稿「カンボジアの農村社会と農民の価値意識」〔15〕が検討を加えている。前者はノロドム・シアヌーク殿下を例として、この国の政治社会における王制の役割の重要性を明らかにしたものであり、後者は国民の大部分を占め、都市とは別に自主自立的な生活に生きる農民の価値意識と長い王制の伝統から生まれた彼らの親王室的な政治態度を通じてこの国の政治社会構造の特色を分析したものである。そのほか大橋久利『赤い王国——シアヌークとクメール・ルージュ——』〔2〕と和田俊『クメールの微笑——カンボジアの民衆

と社会——』〔24〕は、ともにカンボジア内戦における農民大衆の動きを通じてこの国の社会の特色を描き出そうとしたものである。そうして描き出されたカンボジア農民の姿は、それら両者間で動と静のきわだった対照を示している。さらにこれに関連して深作光貞『現代カンボジア考——反文明の世界——』〔21〕は、カンボジア農民および農村生活に関する文化人類学的考察を加えたものである。

カンボジア社会の問題としては、このほかに政治経済活動におけるその重要性ともからんで、在留中国人、いわゆる華僑および在留ベトナム人問題の分析が必要である。拙稿「カンボジア華僑社会の現状とその性格」〔11〕は、カンボジア華僑社会の現地社会への同化の実態とその性格について検討を加えたものであり、しだいに多数に達している中国人とカンボジア人との混血者がこの国の政治社会においてきわめて重要な地位を占めるにいたっていることを明らかにしている。次にこの国におけるベトナム人問題については、拙稿「カンボジアにおけるベトナム人問題の現状と歴史的背景」〔8〕において歴史的背景をも明らかにしつつ検討を行なっている。これによると、カンボジア人のベトナム人に対する反感・警戒心の根は深く、過去数世紀にわたるベトナム人勢力のカンボジアに対する圧迫、さらにフランス植民地間におけるカンボジアへの浸透の増大等によって、それが歴史的に増幅された事情がよくわかり、1970年のカンボジア内戦発生直後の在留ベトナム人に対する虐殺事件の発生もこうした歴史的背景から、初めてよく理解される事情が明らかにされている。カンボジア人の反ベトナム人感情は今後とも容易にぬぐいさることの困難な問題として両国間の関係に重要な影を落としていくものと考え

られる。

次に経済問題についてみてみよう。カンボジア経済の基本は農業であるが、この国における1970年の内戦勃発にいたるまでの農業開発の過程とその各部門別の成果について検討を加えたものに拙編『カンボジアの農業開発』[10]がある。本論文集は現地調査体験をもつわが国農業専門家たちの手になる20余の個別論文からなっているが、わが国におけるカンボジア農業研究成果としては最新かつ、もっとも総合的なものであり、今後この成果をもとに後続の研究が期待される。このほか開発の立ち遅れているカンボジア農業の現状と課題について簡潔に論じたものに東野宗利「カンボジアの農業問題」[20]がある。カンボジアでは1968～72年を対象として第2次5カ年計画が策定・実施されたが、この計画策定にいたるカンボジア経済開発の実情と本5カ年計画の内容を紹介分析したものに拙稿「カンボジアにおける第2次5カ年計画の発足とその内容について」[6]がある。そのほか内戦時代末期の混乱したカンボジア経済情勢について検討したものに拙稿「カンボジア——深化する生活不安と政治の混乱——」[17]がある。

1975年4月のクメール・ルージュを中心とする解放勢力によるプノンペン完全解放以後のこの国の政治的展望については和田俊「ロン・ノル政権の崩壊と新生カンボジア」[23]に触れられている。解放後のこの国の政治経済の実態については、新政権がほぼ完全な鎖国政策をとっているために、正確な把握をなすことはきわめて困難な状況にあるが、これまで若干の情勢分析が試みられてきた。たとえば拙稿「変貌する新生カンボジア——中国寄り路線で開国へ——」[18]は、新革命政権下で社会主義による国家建設の歩みをはじめたこの国の初期約半年間の政治経済の実態について分析

し、対外関係への展望を試みたものであり、また糸賀滋「謎につつまれたカンボジア——特異な革命の性格をさぐる——」[1]は現政権の真の指導勢力や国民生活の実態について、伝えられる断片的資料をもとに描いたものであり、さらに三尾忠志「革命政権下のカンボジアの動向」[22]は2年を経た社会主義国カンボジアの全般的な政治経済情勢について素描を試みたものである。しかし、なお現在もこの国の政治権力構造や経済開発の実態、一般国民の生活と意識などについてはほとんど不明のままに残されているのが実情である。

最後に、このように社会主義化にいたるまでのカンボジア現代史について、ベトナムやラオスのそれとともに、簡潔によくまとめられた概説書として桜井由躬雄・石沢良昭『東南アジア現代史Ⅲ ヴェトナム・カンボジア・ラオス』[4]を紹介しておきたい。

Ⅱ ラオスに関する調査研究

わが国におけるラオス関係研究文献は、本稿の対象とする1969～77年においても非常に少ない。ラオスに関する基礎的知識を提供するものとして、まずこの国の地誌を取り扱った拙稿「インドシナ諸国」[33]のラオス関係部分、およびこの国の現代史をベトナム・カンボジア両国現代史との有機的関連のもとに跡づけた拙稿「インドシナ」[32]および前掲桜井・石沢両氏の共著[4]を挙げておきたい。

つぎにラオス現代政治についての文献をみてみよう。ラオスでは1953年の完全独立後、1957年、1962年、それに1974年と3回の左・右・中立の3派連合政府の樹立をみ、国内統一達成の時代を迎えながらも、その間、残りの大部分の時期を内乱時代として過ぎなければならなかった。1960年代

末期もまさにこの国は、ベトナム戦争に完全にまきこまれた形での内戦時代にあったわけである。W・G・パーチェット著、奥源造訳『メコンの砲艦』[42]には、その国際的背景について説かれている。また木村哲三郎「国際環境の変動とラオスの統一」[29]も、この時期のラオス状勢について、ベトナム状勢をはじめ国際環境との関連を中心に分析したものである。つぎに津田達夫「ラオス革命のめざすもの——愛国戦線書記長論文を中心に——」[41]は、ラオス内戦の一方の当事者であり、しだいにその勢力を発展させてきたラオス愛国戦線側のラオス革命についての主張を紹介したものである。プーミ＝ボンピット著、藤田和子訳『人民のラオス』[43]は、愛国戦線書記長の手になるラオス現代史とラオス革命についての展望をあきらかにした重要文献の邦訳であり、社会主義化した現在のラオスを理解する上でも非常に参考になるものと思われる。つぎに佐々木担「試されるラオスの民族和解」[31]は、ビエンチャン政府側と愛国戦線側との合意によって、1973年9月に調印された和平議定書の分析を中心にラオス国内統一実現への政治過程について検討したものである。なお拙稿「ラオス和平議定書の調印」[35]も同様の点について論じたものである。

その後ラオス情勢は愛国戦線側の優勢裡に展開し、この愛国戦線主導下の新連合政府のもとで、1975年12月2日この国はついに王制を廃止し、社会主義建設をめざすラオス人民民主共和国となった。拙稿「変貌するインドシナ諸国」[36]では、ラオス連合政権下での民衆勢力の台頭に支えられた左派愛国戦線側の優位と右派勢力の没落について、現地調査をもとに報告している。なお前掲拙稿[16]において、ベトナム・カンボジア両国についてと同様、ベトナム戦争期のラオスにおける左

右勢力の政治権力構造についても考察を行なっている。

1975年12月2日のこの国における上記のような王制国家から社会主義的共和国への移行は、ラオス史上の重大事件であったが、この事件の背景や意義について若干の検討がなされている。たとえば拙稿「パリからみた——ラオスを中心とするインドシナ情勢——」[38]は、この事件のラオス政治上の意義とそれが周辺諸国の情勢に及ぼす影響について論じ、また古森義久「王制から一挙に共和制へ——ラオスの革命も本質は過激——」[30]は、今回のラオス政体変革がきわめて急進的な性格のものであることを明らかにしている。なお猪狩章「社会主義化するラオス」[25]では、社会主義化した直後のラオス政治を素描し、この国でのゆるやかな社会変革の実状を紹介している。また三尾忠志「新政権樹立後のカンジアとラオス」[44]のラオスの部分では、社会主義化したラオスの政治状勢について紹介している。

つぎにラオスの社会構造について。ラオス政治社会をめぐる問題としては、北部・中部・南部の3地域間の地域主義、平地民族と山地少数民族の対立、華僑やベトナム人問題、王制の国民的統一に果たす役割などの諸問題が重要であるが、これらについては拙稿「インドシナ諸民族社会の特質とその相剋」[34]や、岩田慶治『東南アジアの少数民族』[26]あるいは、木村宗吉「兄弟王の和解くラオス」[28]、拙稿「王制」[39]等の諸論考で検討されている。また国民の圧倒的多数を占めるラオス農民の生活と意識については、岩田慶治「タイ・ラオスにおける農民の価値意識」[27]および拙稿「東南アジア農民の生活と意識——自然との調和に生きる幸せ——」[40]などにおいて論じられている。

最後に経済問題についてであるが、ラオスに関するものはほとんどなく、わずかに拙稿「ラオス——援助に支えられる未開発経済——」〔37〕を挙げ得るに過ぎない。

以上の研究状況からみて、ラオスに関する調査研究の一層の推進は、わが国学界に課せられた緊急の課題であるといわなければならないであろう。

〔文献リスト〕

カンボジア

- 〔1〕 糸賀滋「謎につつまれたカンボジア——特異な革命の性格をさぐる——」(『月刊エコノミスト』第7巻第7号 1976年7月)。
- 〔2〕 大橋久利『赤い王国——シアムとクメール・ルージュ——』河出書房 1975年。
- 〔3〕 亀山旭「カンボジア——大國の論理を超えて——」(『世界』第335号 1973年10月)。
- 〔4〕 桜井由躬雄・石沢良昭『東南アジア現代史Ⅲ ヴェトナム・カンボジア・ラオス』山川出版社 1977年。
- 〔5〕 高橋保「カンボジア中立主義の基盤とその軌跡」(『世界』第289号 1969年12月)。
- 〔6〕 高橋保「カンボジアにおける第2次5カ年計画の発足とその内容について」(『アジア経済』第11巻第3号 1970年3月)。
- 〔7〕 高橋保「仏領インドシナにおける外国資本」(大塚久雄編『後進国経済発展の史的的研究』アジア経済研究所所内資料 1970年)。(非売品)
- 〔8〕 高橋保「カンボジアにおけるベトナム人問題の現状と歴史的背景——インドシナにおける民族的相剋の一側面——」(『アジア経済』第12巻第2号 1971年2月)。
- 〔9〕 高橋保「カンボジアをめぐる国際環境——対中ソ関係の展開過程を中心として——」(山本登編『中ソ対立とアジア諸国(下)』日本国際問題研究所 1971年)。
- 〔10〕 高橋保編『カンボジアの農業開発』(アジア経済研究所所内資料1971年)。(非売品)
- 〔11〕 高橋保「カンボジア華僑社会の現状とその性格——同化問題を中心として——」(河部利夫編『東南アジア華僑社会変動論』アジア経済研究所 1972年)。
- 〔12〕 高橋保『カンボジア現代政治の分析』日本国際問題研究所 1972年。
- 〔13〕 高橋保「政変後のプノンペン政権における政治過程の動態——共和制移行からロン・ノル=ソン・ゴク・タン体制の成立まで——」(『アジア経済』第13巻第5号 1972年5月)。
- 〔14〕 高橋保「ノロドム・シアヌークにおける政治意識と行動」(高橋保編『東南アジアの価値意識(上)』アジア経済研究所 1974年)。
- 〔15〕 高橋保「カンボジアの農村社会と農民の価値意識」(高橋保編『東南アジアの価値意識(上)』アジア経済研究所 1974年)。
- 〔16〕 Takahashi, T., "Political Leadership in Indochina 1964-74," *Developing Economies*, Vol. XII, No. 4, アジア経済研究所 1974年12月。
- 〔17〕 高橋保「カンボジア——深化する生活不安と政治の混乱——」(『エコノミスト』1975年1月14日号)。
- 〔18〕 高橋保「変貌する新生カンボジア——中国寄り路線で開国へ——」(『朝日ジャーナル』1975年12月12日号)。
- 〔19〕 高橋保「1920年代のインドシナにおける経済開発の特質」(『アジア経済』第17巻第1・2合併号 1976年2月)。
- 〔20〕 東野宗利「カンボジアの農業問題」(滝川勉編『東南アジアの農業・農民問題』亜紀書房 1971年)。
- 〔21〕 深作光貞『現代カンボジア考——反文明の世界——』三一書房 1971年。
- 〔22〕 三尾忠志「革命政権下のカンボジアの動向」(『国際問題』第206号 1977年5月)。
- 〔23〕 和田俊「ロン・ノル政権の崩壊と新生カンボジア」(『アジアレビュー』第22号 1975年6月)。
- 〔24〕 和田俊『クメールの微笑——カンボジアの民衆と社会——』朝日新聞社 1975年。

ラオス

- 〔25〕 猪狩章「社会主義化するラオス」(『アジアレビュー』第25号 1976年3月)。
- 〔26〕 岩田慶治『東南アジアの少数民族』日本放送出版協会 1971年。
- 〔27〕 岩田慶治「タイ・ラオスにおける農民の価値意識」(高橋保編『東南アジアの価値意識(下)』アジア経済研究所 1976年)。

- [28] 木村宗吉「兄弟王の和解<ラオス>」(『アジアレビュー』 第18号 1974年6月)。
- [29] 木村哲三郎「国際環境の変動とラオスの統一」(『世界』 第288号 1969年11月)。
- [30] 古森義久「王制から一挙に共和制へ——ラオスの革命も本質は過激——」(『アジア時報』 第7巻 第2号 1976年2月)。
- [31] 佐々木担「試されるラオスの民族和解」(『世界』 第336号 1973年11月)。
- [32] 高橋保「インドシナ」(衛藤瀧吉編『アジア現代史』 毎日新聞社 1969年)。
- [33] 高橋保「インドシナ諸国」(渡辺光編『世界地理3 東南アジア』 朝倉書店 1971年)。
- [34] 高橋保「インドシナ諸民族社会の特質とその相剋」(『アジア・クォーターリー』 第5巻第2・3合併号 1973年7月)。
- [35] 高橋保「ラオス和平議定書の調印」(『アジア月報』 1973年 11月号)。
- [36] 高橋保「変貌するインドシナ諸国」(『アジアレビュー』 第20号 1974年12月)。
- [37] 高橋保「ラオス——援助に支えられる未開発経済——」(『エコノミスト』 1975年2月25日号)。
- [38] 高橋保「パリからみた——ラオスを中心とするインドシナ情勢——」(『アジアレビュー』 第25号 1976年3月)。
- [39] 高橋保「王制」(『講座・比較文化 第2巻 アジアと日本人』 研究社 1977年)。
- [40] 高橋保「東南アジア農民の生活と意識——自然との調和に生きる幸せ——」(『講座・比較文化 第2巻 アジアと日本人』 研究社 1977年)。
- [41] 津田達夫「ラオス革命のめざすもの——愛国戦線書記長論文を中心に——」(『世界』 第296号 1970年7月)。
- [42] W・G・バーチェット著、奥源造訳『メコンの砲艦』 新人物往来社 1970年。
- [43] プーミ=ボンピット著、藤田和子訳『人民のラオス』 新日本出版社 1970年。
- [44] 三尾忠志「新政権樹立後のカンボジアとラオス」(『月刊労働問題』 増刊号 1976年7月)。

(大阪外国語大学教授)